

## コメント 1

——境界線とナショナリズムの視点から

羽場 久美子

---

羽場久美子と申します。今回は貴重な会合にお声を掛けていただきありがとうございました。私は、欧州の境界線の問題やナショナリズム、包摂と排除の問題、あるいは最近では東アジア共同体と東アジアの地域統合とEUを比較して、和解の問題をどうするか、歴史教科書をどうするかということで東アジア共同体評議会の副議長、国際アジア共同体学会の副理事長などをやっています。また今、沖縄県と共同して、沖縄をハブとしながらいかにアジアの地域統合を実現していくかという試みを行っており、アジアの境界と統合の問題でコメンテーターとしてお声をかけていただき、心より感謝しております。

まず最初に欧州の境界線や包摂と排除のお話をアジアとの関連の中で報告させていただき、その後、それぞれのコメントをさせていただきたいと思います。

欧州は、基本的には境界線の歴史と言われていています。分裂と抗争そして戦争が1500年以上、欧州の歴史の中で続いてきました。欧州史は境界線を巡る戦争の歴史と言っても過言ではありません。そうした中で、第1次世界大戦で900万人、第2次大戦では5,000万～6,000万人という人が亡くなりました。ヨーロッパの死者は3,200～3,700万人、それに対してアジアは1,800-2,000万人でした。いずれも凄まじい数ですが、アジアの2倍の人々がヨーロッパの境界線を巡って亡くなったのです。ロバート・ケーガンは第2次大戦までは欧州がマルス（戦いの神）であったと言っています。第2次世界大戦までの累々たる死者の上に、ヨーロッパは二度と戦争をしない、境界線を巡っての戦いはやらない、戦いの原因となるエネルギーを共同管理する（石炭鉄鋼、核）というところから、欧州統合が始まっていくこととなります。その意味では今でも戦争の危険性のあるアジアにおいてこそ、戦後ヨーロッパに学ぶべきところはある、と思います。

現在、和解についての比較研究をアメリカ・欧州と国際共同でやっているのですが、ショックを受けたことの一つに、イスラエルとドイツの和解があります。ご存知のようにアウシュヴィッツ他で600万人以上が殺されたナチスのホロコーストについて、イスラエルのユダヤ人の人たちが、「ドイツは良くやってくれている」ということを、昨年12月の会議で言っていたことです。私たちは、例えば南京の方々から、日本は良くやってくれていると言われるようなことはできるのだろうか。それはやはりすごいことです。何がどう違って、何が学べるのか、考えてみたいと思います。

ヨーロッパは、1500～2000年にわたり、境界線を巡る紛争と対立の歴史でした。しかし一昨年、欧州（EU）がノーベル平和賞を受賞したように、欧州では70年間戦争が起こっておらず、ドイツとフランスは二度と戦争をすることはないだろうと言われていています。他方で、今、東アジアでは国

境線を巡って、きな臭い状態が高まっています。北方領土、竹島、尖閣諸島をめぐり、私たちは大切な隣国3国と対立状況に入り、戦争も一触即発ではないかという状況に入っています。

ご存じのように第1次世界大戦は、ボスニアの境界線であるセルビア人のナショナリスト、プリンツィプがハプスブルク帝国の皇位継承者を暗殺して始まりました。それはまさに帝国の境界地域で起こった一瞬の出来事でした。しかし辺境での一瞬の事件が世界大戦を引き起こし、4つの帝国—ハプスブルク帝国、ドイツ帝国、ロシア帝国、オスマン・トルコを崩壊させたのです。

東アジアでは、日本でだけではなく中国も殆どの境界線を巡って、日本、チベット、ウイグル、インド、ベトナムと対峙してきました。東アジアだけではなく、どの国も境界線は紛争と対立の地域であり、それは和解と共存を恒常的に試みていかなければ、常に紛争や戦争が起こる地域なのです。

現在、「パワーシフト」と呼ばれる先進国の停滞と新興国の拡大が起こっている中で、中国の成長が停滞する日本を不安にさせ、相互の対立関係が生まれていると言えます。ヨーロッパでも、実は今、ナショナリズムの分裂の危機が出てきています。今回の欧州議会選挙で、右翼ポピュリスト政党が成長し、イギリス、デンマーク、フランスという西欧の中心で、人権や社会保障が充実しているとされる地域で、右派が2割以上の得票数を獲得しました。どうしてグローバリゼーションの中でナショナリズムなのかということですが、グローバル化と冷戦の終焉により物理的な境界線が開かれて、渋谷さんの報告にもあったように、東や南から次々に移民やマイノリティが入ってくると、その開かれた境界線の内側で、異質者同士の対立が始まっていきます。境界線が開かれる中で、これは金さんの報告にもあったように、心の中にもう一つの境界線がつけられていく。つまり、グローバル化の中、物理的には防げない開かれた境界線から入ってくる人々に対して、自分たちをどう守るかということで、まさに「We」と「They」、「我々」と「やつら」という境界線を心の中に引いていくことがナショナリズムの成長につながっていきます。

それからもう一つは、これはちょっとコントラバーシヤルな問題ですが、民主化による不安定化があります。民主主義が煽られることによって、逆に民衆のナショナリズムや団結と排除の意識が高まる。たとえば東欧革命が起こって政府が次々と退陣、ソ連は崩壊してしまう。ユーゴスラビアはそれぞれの民族が互いに敵対し独立することで10年も殺戮が続く。あるいは「アラブの春」で旧体制が崩壊し不安定化が高まる、イラク戦争やルワンダではフツ派とツチ派の対立が起こるといっても含めて、民主化というのは、実は近代化と重なって「均質化」を促していきます。均質化を促すことが異質者の排除の論議を生み出す。マイノリティが同化され、あるいは排除される。ユーゴスラビアが崩れたのもソ連が崩れたのも民主化が導入されてからです。民主化、市民社会の形成は、多様な民族が住んでいたユーゴスラビアをバラバラに解体していきます。先ほど高江洲さんのご報告にあった近代化の問題とも重なりますが、近代化というのは均質化を促し、その結果マイノリティを排除する、あるいは同化していくという、どちらかの傾向になってくるわけです。

こうした中で、現在のようにナショナリズムやゼノフォビアが広がっていくのです。

ゼノフォビアというのは外国人嫌いのことです。「外国人嫌い」はヨーロッパでは古代から存在しています。人間の本能とも言えます。自分と違うものに対してそれを忌避したり排除したりという考え方が、もともと人間の防衛本能としてありますが、それが現在、民主化との過程の中で広がってきています。

何が問題なのか。一冷戦が終焉し、グローバリゼーションが始まり、国境が開放されると、西か

ら東、あるいは南から北に、賃金格差から人の移動が始まります。これは皆、より良い賃金や豊かさを求めて移動していくわけですが、この段階ではいわゆる2次元的、水平的な移動になるわけです。ところが最近、未熟練労働者ではなく頭脳労働者の人たちが次々に入ってくると、市民社会のピラミッド構造に変化が起ってくるようになります。3次元的、垂直的変化です。最初は核技術を持ったロシアの軍事技師、大学教授や医者、さらに自分の人生をより豊かに活用したいと考える、特に大卒の若者や技術者などが次々に移ってくる。すると、グローバリゼーションの中で二極化し没落する中間層の利害とぶつかり始めます。そのような状況の中で、社会のピラミッド構造に変化が起り、没落していく中産層のあいだに、ナショナリズムが広がってくるようになります。

あえて言えば、下層である3Kの労働者が移民として入ってくる分には、その国の社会にはほとんど影響を及ぼさないのですが、中間層同士の戦いになってくると、社会の政治構造を担っている中間層の市民と頭脳労働者の移民とのあいだに対抗関係が生まれます。今日のお話でも、台湾にしても朝鮮人にしても、あるいは日本から朝鮮に出ていく人たちにしても、どちらかと言うとトップエリートないしは中間層の人たちです。それが非常に社会構造に影響を与えていくことになります。

内部者から外部者への排除の論理というのはすごく恐ろしいことで、いわゆるナチス・ドイツ時代のユダヤ人排斥、これが現在、ヨーロッパでも起こってきています。特に現在、スウェーデン、オランダ、スイスなどの、いわゆる人権擁護国で反移民の運動が広がっている背景には、欧州が移民も受け入れて、移民にも社会保障を充実させよう、教育も充実させようというような、EUのトップエリートの政策が裏目に出た形です。市民のあいだには自分たちは税金を払って社会保障を充実させてきたのに、非合法に入ってきて子どもを我が国で産み落として国籍を取得したような移民たちに、なぜ手厚い社会保障を与えなければいけないのかという「中産層の利己主義」的な意識が広がっています。アメリカでもオバマ大統領が皆保険制度を導入しようとしたいわゆる「オバマ・ケア」に対して、中産階級の人たちがごうごうたる非難を浴びせました。なぜメキシコ人の非合法移民の子に我々の大切な社会保障をただであげなければいけないのか。そうした中産層の没落と反発が、現在の先進国のナショナリズムの背景にあります。

こうした問題をどのように解決するのか？—難しいことですが、失業者の増大や社会保障の削減の問題を解決していかなければならない。雇用の創出や競争力の拡大と、移民にも社会保障を実現させていくことが重要ですが、一方で心理的な問題としてはやはりヨーロッパの戦後の歴史に学び、いかに異質者との共存や和解を実現していくかということが重要だと思います。

このような場を集まって、考えの違う人たちがお互いに意見をぶつけ合って、そして違う考えを認め合うことが一つです。それから、独仏和解の際に一番要になったのが、独仏の若者たちです。ちょうど戦争直後なので、自分たちのお父さんやお兄さんを殺されたような子どもたちが旧敵国に行って、そしてその敵国でホームステイをすることによって、その国にもお父さんとお母さんができる。今、ドイツとフランスのあいだには800万人のそうした子どもたちが巣立ち、両国の発展と友好のために活躍しており、これが二度と戦争をしない理由になっていると言われています。私たちが、日本人、韓国人、台湾人、中国人で共にそれぞれの国にお世話になったお父さんとお母さんがいる、と言うような状況を作り合い交流し合うことがとても重要ではないかと思います。

これらを踏まえた上で、それぞれのコメントをさせていただきたいと思います。いずれも大変思想

的に深い御報告で、大変勉強になりました。ありがとうございました。まず、金さんの近代における朝日本人の分析のなかで、対馬人、あるいは釜山の人たちについてですが、3つの大変重要なポイントをお話しされていました。境界地域というのは、一国的な視点では限界がある。だから、ネットワークや国境を超えた関係を見ていかなければいけない。これはすごく重要な第1の視点だと思います。

それから2つ目は、境界というのは分断するものだけではなく、つなぐものであるということをおっしゃっていました。私もまさに境界線の分断と結合の問題を考えており、大変示唆的でした。いわゆる釜山から対馬、そして日本につながるラインです。こうしたつなぐものであるということ、そのつなぐものが刻々と変化するという点も見ていかなければいけない。

3つ目は、被害者と加害者の転換という話です。これらはいずれも境界の問題、マイノリティの問題を考えていくときに、非常に重要な論点だと思います。特に釜山における日本人とか、対馬の人たちが、被害、加害の両方の転換、あるいは境界線における歴史的な変化ということと言われるときに、彼ら自身が自分たちをどのように認識していたのか。彼ら自身も、被害者のときには被害者、加害者のときには加害者というように、自らが近代化の先兵であったり、あるいは敗戦の被害者であったりというように意識が変わっていったのか。それとも彼らは一貫して何らかの使命感、ないしは自分たち独自のアイデンティティを持って、その異なる時代をつなげていったのかということに非常に関心を持ちました。

それから高江洲さんのご報告で、排除と統合の論理というところでは、私は非常に共感するところがあります。「We」と「They」、「我々」と「やつら」という対抗関係もそうですし、抵抗の中での統合の論理についてもまさにEUにおける東と西、南と北の問題につながり、共感するところが多くありました。そうした中で、先ほどお話しされたモダニティとデモクラシーについて、奄美の人たちはどのように考えてきたのか。というのは、モダニティもデモクラシーも私たちとしては非常にプラスの概念があると思うのです。それにもかかわらず、先ほども触れたように、デモクラシーやモダニティというのは、マジョリティに合わせてマイノリティを国民化していく作業でもあるわけです。沖縄などは典型的かもしれませんが、奄美大島もそうかもしれませんが、そうしたことが制度的に行われるか、暴力的に行われるかで差はあるのかもしれませんが、それらは必ず心の中にも強制性や排除の論理というものを生み出してくるのではないかと思います。

それから最後に「我々意識」を強化する必要があるということをおっしゃられました。私は一方ではとても共感するのですが、「我々意識」を強化するということは、必ず我々という意識の外に「彼ら」というものが出てくるので、「彼ら」と「我々」を分断してしまう危険も時にあるのではないかと。そう考えると、ヨーロッパの多様性の中の統合と言われるように、「我々」がいくつものレベルで楕円が重なり合うような形で存在し、「我々」ではない彼らの「我々」というものも認めていくこと、違いの容認というか、違ったものとの共存ということが大切ではないかと思いました。

何先生のご報告では、日本における在日台湾人の境界線地域の問題ということで、非常に緻密な歴史分析、社会科学的な分析でもあり、多くのことを教えていただきました。そうした中で、強調されたこととして、日本社会の閉鎖性や、そうした中で台湾人マイノリティ、あるいは華僑の存在における不安定性や問題点を言われたと思います。ただ、私もヨーロッパをやっている、あるいは日本人として考えたときに、日本社会の閉鎖性は、先ほどのモダニティとも関連して、国民国家統合において均質を追求する過程、均質による団結と同化を図っていく過程では、モダニティとし

て必然のことでもあったのではないかとも思います。

たとえばフランス革命のときにフランス語、即ちパリ語を話せた人は3割しかいなかったと言われています。その後、フランス革命政権というのは、凄まじいテロルも使ってフランス革命の理念をフランス全土に広げていきますが、それは、7割のフランス語を話さない、地方語を話しているフランス人たちをフランス語化＝パリ語化、ないし革命理念の強制的刷りこみを行っていく過程でもあったのです。これは非常に暴力的に進行し、フランス革命以降のロベスピエールの「教化」のテロルに結び付いていくわけです。これと同じようなことが、近代の欧州各国で起こり、あるいは日本でも行ったに過ぎない点もあるのではないかと。もちろん、だからと言って免罪はできませんが、「近代国民国家形成」が、19世紀末から20世紀初頭の暴力的・武力的な紛争の中であって行われたことであるとすれば、それはまさに欧米を真似て、時にはさらに暴力的に日本がやったことでもあります。それを否定するとすれば、ではどのような形で将来の共存関係をつくっていくかということを考えていくことが、これからの課題ではないかとも思います。

これらの点は非常に難しくかつ重要であります。お三方のご報告を聞いて共通して思ったのは、多様性の中の統合を境界地域を軸として行うことができないかということです。奄美を中心として、沖縄をハブとして、あるいは日本の台湾人、華僑を中心として、そこから発信するというような新たなアイデンティティ構築ができないか。ヨーロッパでは実はボスニアのムスリム・マイノリティの人たちが、一番ヨーロッパ人アイデンティティが強いのです。またアルバニア人が非常に強いヨーロッパ人意識を持っています。他方イギリス人やフランス人は自分がヨーロッパ人だという意識を持つ人は少ないのです。あえてヨーロッパ人と言う必要はない。ヨーロッパでマジョリティだからです。ですから、大民族ではなく、むしろ小民族、マイノリティのほうが全体のアイデンティティをつなぐ平和的な使者になれるのではないかと。欧州では、ベルギー、ルクセンブルク、オランダというベネルクスの小国がヨーロッパ、EUの中心です。彼らは何度もフランスやドイツに国土を蹂躪され占領され、それらの国の中に組み込まれて生きてきました。ですから、戦争の被害者、被害国こそが新しいアジアの中心、リーダーになってそこから発信していくことはできないだろうか。負の記憶や経験が、多民族共存の絆になっていくというような意識がつかれないかということ、三人の方のご報告を聞いて考えました。

最後に、渋谷さんのご報告については、越境的な市民ネットワーク、ラオスやタイの問題について非常によく調べられていて、また詳細な現地調査もなされていて、感銘を受けました。とくに反ダム運動の市民ネットワークについては、他の三人の方のご報告と比較したときに、人々の意識レベルがどのようなものだったのかという点について関心を持ちました。

ネットワークアイデンティティの実態についてはあまり見えなかったのですが、彼ら自身の中にも葛藤があると思います。ASEAN諸国は、やはりそれぞれ境界線を巡っていろいろな対立もありながらその対立と多民族性を超えて共存しているという、アジアにおいては素晴らしいモデルです。それゆえ東アジアに比べてなぜASEANではそうしたネットワーク形成や共存が成功しているのか、ということは非常に興味深い論点です。共同の目的があったからでしょうか。あるいは敵が明確であったからでしょうか。ぜひそこをさらに深めていただきたいと思います。

皆様の御報告、全て大変勉強になりました。誠にありがとうございました。

(はば・くみこ 青山学院大学・大学院国際政治経済学研究所教授)